

「はじめに」

昨今は「障がい者グループホーム（以下GH）」など、地域にまた身近にその存在が当たり前になり認知されてきたように思います。GHは簡単に言えば少人数で地域で生活をする為の住まい（家）の事です。その出発点は「自分らしく普通に暮らしたい」という当り前の感覚・願いからです。その思いに障がいの有無は関係ありません。

GH「その成り立ち」から

GHは30数年前、当時の厚生省障害福祉課長が全国施設長会議のなかで入所施設に代わる新たな暮らしの選択ができる生活の場として提案されたことが始まりです。「『大きな施設を解体して小さなホームを生活の中心にしていく』という部分が贊否を呼んだ」と、その会議に参加した当時の四衢園長が話されたのを印象的に思い出します。



当時「施設解体論（単に施設を廃止する）」として歪曲して語られてしまったことが大きな誤解を招いたのです。しかし、大規模な入所施設は入所者の自由な選択を妨げていたことは事実です。その後施設

飛騨慈光会ではその時流に沿い、平成元年のGH制度発足時から高山市内で賃貸物件を利用したGHを開設しました。県内ではまだ2法人のみの取り組みでした。



GHは「わたしたちの家」

この見出しが意味することとは、「自分の意思で自分らしく暮らすところ」であり、自分主体で暮らしていくける所、いわば「自分の城」といふことです。



そして、同じ屋根の下に仲間がいることが安心に繋がります。

入居者は20歳前後から70歳代までと幅広い年齢層です。入居者の方全員が一般就労、パート雇用、福祉事業所に通われています。仕事から帰つて疲れた体を癒せるのも気の合う仲間たちと自分の家だからこそです。

ご近所の方からは、温かいまなざしとともに、時には暮らしのアドバイザーとして叱咤激励を頂くこともあります。こうしたことがまさに普通の暮らしだりで、『わたしたちの家』が地域の中にあることを実感できるのです。

ここは「わたしたちの家」

グループホームの暮らし

GHでは
「私のことは私が決める
当然社会人としての責任も」

GHの暮らしは
「サービスは最小限、
だけどサポートは最大限!？」

GHの
これから

暮らし続けるために

趣味・こだわり、もの・物・モノで溢れかえる部屋、小さづぱりできれいな部屋・色々あつてあたり前：しかし時にはより良い暮らしのためにアドバイスを送ることもあります。ごみを出すにもきちんと分別する。生活力を磨くには常に学びが必要ですね。

スタッフによる食事提供、住環境の保全、毎日の健康把握、通院や休日・余暇の支援などの生活ベースを支えながら、洗濯、掃除など自分のことは自分で行えるようサポートをしています。

基本は自立に向けたまなざしです。元気に「いつ

らしゃい」そして「おかえり」がなによりです。

高齢になつても、障害が重くとも、地域で自分らしく暮らすことを望まれる方はたくさんいらっしゃいます。現時点では医療・介護のニーズに十分対応できる体制ではありませんが、今後は幅の広い利用に向けての条件整備が制度を含めて整えられていくものと思います。



その中で私たちも利用の状況にあわせてGHの仕組みを変えしていくという柔軟性も持ち合わせていく必要があります。色々な暮らしの選択を利用する皆さんと一緒に考えていく必要があります。

飛騨慈光会のグループホーム配置図



グループホームの利用者

Aさんにお話を伺いました

僕を入れて、5人が国府町のふじホームで暮らしています。

GHの良いところは、他の人や世話人さん・職員さんと話ができるところ。にぎやかで盛り上がる。この間、世話人さんが「虹が出るよ」と教えてくれて、自分の携帯で写真をとりました。

日中は週5日、高齢者デイサービスセンターで清掃の仕事をしています。給料が出たら、僕の好きなホラー映画のDVDやゲームのソフトを買ったりします。コロナが落ち着いたら、もっとライブとか出かけたいです。（ご本人のお話を元に構成しました）

いつまでも一人ひとりにとつての
「グループホーム」です。

「グループホーム」です。